

発行/平成元年2月15日 No.9
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 9

特 交 流 集

☆ 国際交流 ☆

国際交流にみる「国際化」/松 山
青年海外派遣協会の冒険/明 浜 町

☆ 都市と農村の交流 ☆

瀬戸内シーサイド留学/野忽那島

☆ 異業種交流 ☆

育つまちづくり戦士たち/新 居 浜
愛媛トイレ文化研究会と地域間交流

REPORT

GENKI 印

夢の仕掛け人達

『関前夢倶楽部』

鉄の歴史村「地域づくり実践法」

スペイン・モンドラゴンを訪ねて part II

「女性が語ろう、まちづくりの集い」

雑 感

MESSAGE

心に残る風景・バルセロナ

TOWNタウン パソコン通信

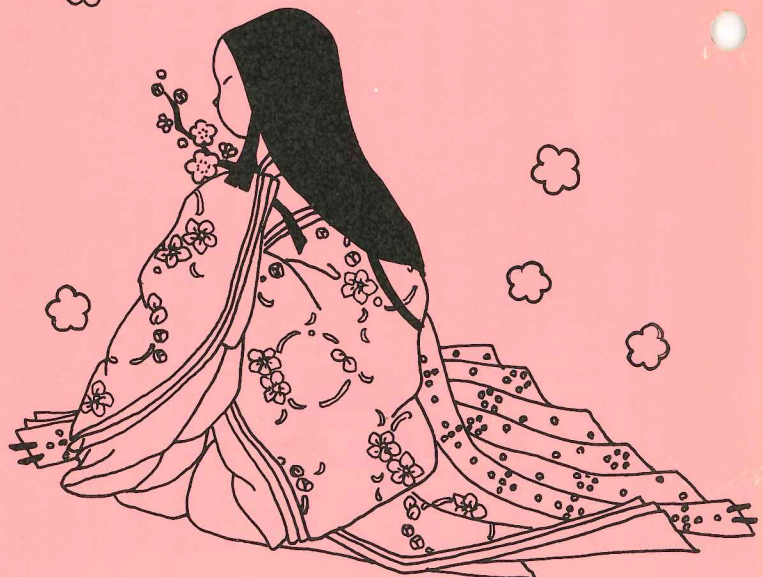
研究会議 News Letter

えひめ地域づくり研究会議の
総括と展望

佐田岬からの発信

全国「木」のフォーラム開催

「提詩」パートII



国際交流にみる「国際化」

(株)英語アカデミー代表取締役

田中直彦さんに聞く

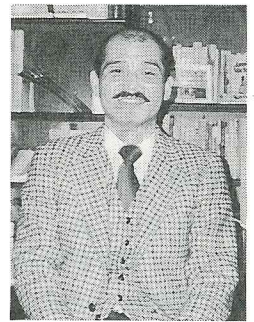
時代の流れの中で地域の国際化がいわれている。国際交流の分野でも、こと人物交流といえれば少し前までは語学力のある一部のエリートが「国や地域を代表する」感があり、「応接間」的であったようだ。

しかし、近ごろではむしろ、ある国のある町のある人同士の交流が盛んになり、その中身も目的や性格によって多様化して来ている。そこで国際交流にみる「国際化」を私達がこれからどう捉えたらよいかを知りたい、英語塾を経営する傍ら、国際ロータリークラブ二六七地区・長期交換委員長サクラメント姉妹都市交流など第一線で活躍中の田中さんを訪れてみた。

● 国際交流の原点

「私のこれまでの経験の中で考えたのは、例えば英会話は一つの交流の手段でしかないということと、日本人である自分自身をまずよく知ることです。日本人が外国でよく使う言葉に「We Japanned」私達日本人は・・・とか「You あなた方・・・人は」という型にはまった言い方をしてはいないでしょうか。話す言葉や習慣が違ったり色々あるでしょうが、最後はその人が持つ人格が大切なんです。結局、国や地域が築いているアイデンティティーも人が創り出していくものではないから」と、まずはお互い人間同士の付き合いなんだと強調された。

どこの国の人でも美しいものは素直に美しいと誉め称え、嫌な時には不快感を表し、嬉しいときは共に喜び悲しい時は涙を流す。外



田中 直彦 さん

国、外国人との付き合いだと考える前に、日本人同士も含めて相手も同じ人間としてつきあい交流するのが原点ということなのである。

次に田中さんの「国際化」に対する視点について紹介したい。

「『国際化』を英語に直すと『Internationalization』があてはまりそうだが、アメリカやカナダでは殆ど使用されていない。従って『国際化』の化は意味をなさないようである。二千年にも亘って特に外国人の大きな移民もなく、以来、同じ言葉を喋り同じ黒い髪で、ほぼ同じ習慣を維持し続けているのは日本だけといっても過言ではない。日本から見ると当たり前のようだが世界から見ると他国とあまり交流のなかった不思議な国に映るようである。

国際化にもいろいろな部門の国

際化があり、特にモノの国際化は私達が知らず知らずに進んでいる。ふつう私達の頭に一番に浮かぶ国際化は「人物交流」であって、これが一番難しく、しかしながら最も重要な「国際化」ではないかと思う。間違っただけではないのはこの場合の「国際化」とは外国や外国人に対してただ迎合することでは決してない。相手に対して卑下することもなくおごることもなく相手を理解し、長所を認めてそれを伸ばしてあげることであり、また、相手の短所を知ってそれを補ってあげることはないかと思う。」

何よりもまず日本という国そのものが世界の国々と共生しながらも、どちらかといえば特殊な条件下で存在していることを認めること。次に日本、日本人という垣根を取り払うことによって相手の状況を理解し、自らが確固たるものを持ちながら成長していくことが国際化の中でいかに重要かを指摘している。

しかし一方では私達の育った日本を忘れ日本語を始めとする文化

慣習を捨て去るような安易な「西洋化」や、その国の言葉が話せることだけが国際化ではない、ということも大切な視点なのである。

●国際人として

田中さんは、留学などによって経験することの意義は、それ自体では極端にその人が変わるわけでもなく単に語学力や知識を身につけることが目的でもないが、自身が肌身でその国を感じることで、自信がつかうことだといわれる。



英語アカデミー

ご自身の娘さんも松山市の中学

交換留学生で西ドイツのフライブルク市へ留学されたが、人の交流を通して得たものは何よりも本人のこれからの人生に対する見方や考え方が明確になったことだという。行政などの支援による海外派遣でも本人が地元に残らなければ意味がないという見方がされがちだが、これからも国際人として世界で活躍していくことが結局は地域の貴重な財産になるはずだ、と地域にもよりグローバルな視点の必要性を訴えられた。

また、これからはたとえ民間交流といえども人的交流のみに留まっているのではなく、例えばお互いの経済交流に発展するケースがでてよいと言われる。特に経済界などではモノとりわけ食糧の分野では海外のモノがあふれ、それを媒体として「目に見えない所」で止むなく国際化が進められているといった背景がある。それならば、人と人の「目に見えるつながり」を持ちながら経済交流をはじめとするより高度で多様化した「ギブアンド テイク」の交流もこれか

らの国際交流に求められているのである。

●スペシャリストよりもゼネラリストに

田中さんは日本でも有名なある先端産業におられた経験から、これからの時代では「ゼネラリスト」を目指して欲しいといわれた。それは例えば一つの会社がひとつのヒット商品を創りだすことはますます困難になってくる。従ってこれからは多数の会社のノウハウをいかに集中しまとめあげていくかが問われる時代になってくる。これはモノであれ、人であれ、組織であれ一つのことに特化するスペシャリストの存在もさることながら、ゼネラリスト（全般をよい方向へ導く能力をもっている人）が望まれているということだろう。「国際化」という舞台でもゼネラリストが要求されている。

最後に「国際交流で大切なのはいつも自分自身のアイデンティティをしっかりと築きながら自らの



胸を開いていくこと、またその行動が正しいかどうかではなく、まず一歩踏みだしていくことが出来るかどうかです。だから「検討している」ということは何もしていないことと同じなのです。私は行動することがモットーですから自分を充電させる時間と思いつつ放電する時間をできるだけ持つように考えています。」といつも自分を忘れていない。

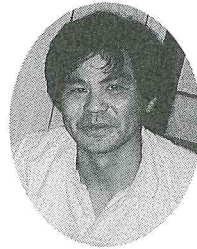
貴重な時間をいただきながら、いつも笑みを絶やさず気さくにお話される姿のなかに「国際人」としての広さ大らかさを感じた。

(取材/幸地)

海外派遣協会の冒険

明浜町青年海外派遣協会

宇都宮 氏康



宇都宮 さん

何もない小さな町
海と山に区切られた帯
人々が汗を流し
夢を組み立て始めた時
自然の中に取残された
ような
何もない小さな町
それでも
人と人が触れ合い

人と人が考え合い
人々が汗を流し
何もなかったことの幸
せを
しみじみと感ずるかも
知れない

● 発 端

わが町にも詩人はいて、ひかえめな彼はつぶやくようにそつと歌うのだ。時あたかも町が起死回生策として誘致しようと目論んでいたLPG基地について「考える」運動をぼくらが展開していた頃であった。詩人の役割は何げない日常のくらしや言葉や意識に異化の光を照射して、ぼくらにある覚醒をもたらすことにあるのだが、彼の詩はまさにそのように機能したので

あった。ホントウダ ナニモナイ
ゾ ボクラノマチハ。ソシテ、ボ
クラハ ナニカヨコレカラ ックッ
テイケルト イウノダロウカ？ 暗
雲。水平線の果てにも亦暗雲。
モラトリアムを過すぼくらの、
バブもコーヒーショップも何もな
いアケハマでの新しい「遊びづく
り」が始まった。「みんなの企画
室「ポラーノの広場」」（通称
「二万円出しで遊ぶ会」）の一年目
（一九八二年）はその名も『ちょっ
と退屈な日々』という本を出版。
二年目、スナックフォーラム。三
年目、岡林信康コンサート。そし
て四年目に思いついたのが「海外
派遣」であった。

● 「交流」その1

寝た子を起すべきか否か、とい
うような不遜な議論をするつもり
はない。けれども運動が少しでも
仲間うちの枠を越えてしまおうと
大なり小なり地殻変動のようなも
のを誘発してしまう。派遣協会の
設立にこぎつけるまでの、さまざま
まな人達とのさまざまな場所（機
会）での議論こそ「町づくり」に
とっての大切な住民同士の交流
（コンセンサスへの道）なのでは
ないか。対話は今でも続いている
が、たとえば「そんなにお金をか
けて海外に行かせなくても、人づ
くりの方法はいくらでもあるでは
ないか。国内の先進地視察とか町
職員の交換事業とかいうことをま
ずやるべきではないか」、「外国語
も外国事情もわからずに、いきな
り若者を放り出してどうなるもの
であろうか。行くなら周到な準備
をしてからにすべきではないか」
「ただだか一ヶ月くらい外国へやっ
たからといって人間がそう簡単に
変わるものか」、「海外派遣事業など
よりももっと他に明浜町にとって

急務の問題がある筈ではないか」
等々の声にどう答えていくか、そ
のプロセスこそまことにシンドク
てワクワクするワンダーランドな
のである。ぼくらはもちろん行く
さきざきで進められる酒を御馳走
になりながらトッポを言っつては笑
われるのだが、「町づくり」を流
行としてではなく住民の居直りが
自治の叫びとして焦眉の課題とす
るのなら、ぼくらはむしろそうし
た問い方そのものを捨てるべきだ
と思った。シンボジウムの時は過
ぎているのだ。考えたことは即行
動に移すしかないし、異見を持つ
なら言い出しベエとして旗を上げ
るべきなのだ。問題に立ち向う道
は多元的な方が絶対いいのだから。
その方がみんなの顔がいきいきと
輝いているに違いないのだから。
（それにしても一万円という大金
の重みよ！夜のネオン街でカワイ
コちゃんにウインクされて出すも
のには羽がはえているが、こちら
のものには鉛が入っている。思え
ば戦後に限っても自治体がネオン
街の気軽さで人材育成に投資をし
ていれば今日全国の地方自治体が

みまわれているこの困難な事態からもう少しましな地平に脱け出していられるのではないか……)

● スモール・シテイ

ブライト・ライツ

ぼくらの事業は「遊び」でなかったら本当は意味がないのだが、遊びの井戸から出てしまったのだから仕方がない。ぼくらが真面目に語った部分は「明浜町青年海外派遣協会規約」の前文に謳っている(ので暇な人は差し上げますから読んで下さい。)

かくして一九八五年十一月十七日の設立総会を迎え、ぼくらの協会は船出した。そして、ぼくらはただちに二人をアメリカへ送ったのである。反響があった。新聞が「明浜町(民)には進取の気性がある」などと書いてくれると町民の誰もがその気になって顔をほころばせたものである。ぼくらの派遣事業はぼくらの町のシンボリックな存在にさえなっていた。というわけなのである。

● 「交流」その2

これまでの三年間で八人の青年がアメリカ・中国・スペイン・フランス・ブラジル・オーストラリアへ旅立って行った。(今年も間もなく三人が発発する。)それは国際交流などと呼べるようなものではないが派遣生それぞれにとっては異文化・異民族体験の中で個人的交流が生まれている。時にはむこうで知り合った人が日本へ来てわざわざ明浜まで訪ねてくれることもある。そういう時には交流の輪は一挙に広がることになる。するとまた新しい発想と活動が湧く。県の国際交流事業を積極的にもらいうけブルネイの留学生を受け入れる。桜の咲く頃には、わが町の誇る愛媛八勝のひとつ・野福峠で「国際交流花見の会」を催して留学生を迎え入れる。明浜町を訪れる外国人も交え派遣生達が学校で子供達に向けて体験発表をする。近隣市町村からの問い合せや講演依頼も多く、直接の来訪者も多くなってくる。

これらは名づけ難いが次第にあ

るネットワークを形成していきつつある。(「情報」の価値を実感させられる)。

それから、ぼくらが念願したもう一つの重要な「交流」がある。昭和初期この町からブラジルへ移民していった人達やその二世三世の人達との絆を深めることである。



ブルネイ留学生と

それはぼくらがアイデンティティをとりもどすために必要なぼくらの祖父母達の歴史——うしろめたさや怨嗟や悲惨を乗り越えて新しい関係をうち立てる作業でもある。派遣生を迎えてくれる彼地の人達の歓迎ぶりや協会へ寄せられた手紙などを通してぼくらは彼等の深い故郷への想いを痛感させられる

し、その故郷に派遣協会が出来たことを激しく喜んでくれる彼等に接すると、ぼくらの事業の予期せぬ意味も悟らされてしまうのだ。いずれにしてもこの関係は持続させ発展させなければならぬ。

さらに、今年からぼくらは世界の各地から愛媛県に来ていた人達を町内各家庭(特に子供達に)に迎え入れるホームステイ事業も始めようと思っている。それは大きな意識改革の運動になるに違いない。

● おわりに

帰って来た派遣生達は今、青年団や農業・漁業後継者協議会や商工会青年部などのトップに立って、おおらかに自由に活動している。何のプレッシャーも感じていないその伸びやかさがとてもいい。

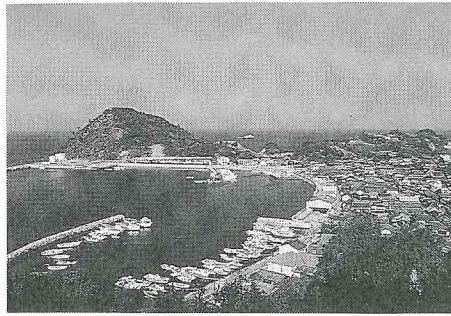
今時代は、明治維新・敗戦直後に続く大きな世代交替の時期に来ているという。田舎もあらゆる面でパラダイム変換のキーボードを押さなければならぬのではないか。何かがとても大きく変わろうとしている気配が感じられる。

瀬戸内シーサイド留学

—— 都会っ子で島が変わる!! ——

野忽那小学校長 野首 恒明

ひっそりと静まり返っていた島に、元氣いっぱいの子供たちを迎えた野忽那島は、いま留学生パワーで島が揺れている。



皿山のふもとに学校がある

一年中、何ひとつ事件らしい事件はなく、おとしよりと数人の子供たちが平和に暮らしている島、野忽那島は、松山市から海上わずか十数キロを隔てた瀬戸内海に浮かぶ周囲六キロ、人口三百六十人

の小島である。

島内唯一の本校は、百十年の歴史と伝統を持ち、児童数も戦後の一時期には二百数十人を数えたが、その後の過疎化現象により、ここ数年は全校児童十名以下という極小規模校になっている。児童は純真素朴であるが、積極性や活力に欠ける点がある。そこでこの子供たちに活力と刺激を願って、昨年度より、自然志向の都会っ子を一年間を単位で受け入れる「瀬戸内シーサイド留学」制度を発足させた。

昨年九月からのテストケースも順調に終わり、今年四月からは西日本各地から八名の留学生を受け入れて、早くも十か月が経過した。

四月七日、保護者に連れられた留学生たちは、学用品や身の周りの品を両手に抱え、目を輝かせて元気いっぱい船から降りてきた。棧

橋には里親をはじめ島の子供や教職員、実行委員等が出迎えた。あ

いにくの雨風の中、数社のテレビ取材班や新聞記者のカメラが留学生を追った。集会所での受け入れ式、里親宅での入居の挨拶、荷物の搬入、子供部屋の整理等あわただしい中での取材に、留学生も里親も興奮気味であった。その様子はテレビや新聞で県内はもちろん西日本の各地に報道された。故郷野忽那島がテレビや新聞で大きく報道されたのを見て、各地に住む出身者から島の家族や知人、友人に激励の電話や手紙が届いた。その反響の大きさに島の人々は一層自信を強めたように思われる。

幸い留学生たちはどの子も明るく元氣のよい子供であったから、学校や里親の指導をよく守り、進んで挨拶運動にとりくんだ。全く見知らない社会にとび込んだ子供たちは、だれかれの区別なく出合う人ごとに「おはようございます」「こんにちは」の挨拶を元氣よく繰り返した。島の大人たちには今までそのような習慣がなく当初は面くらったようであったが



全校揃ってぬか場の海岸で

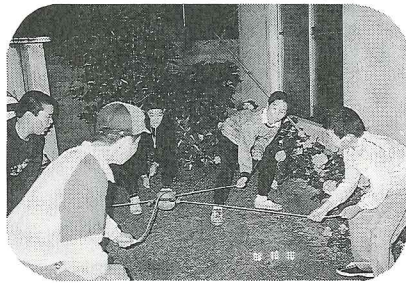
子供たちが一方的に続けているうちに、今まで挨拶してくれなかった人たちも次第に挨拶を返してくれるようになった。およそ半年後の十一月、地区広報委員会で「留学生が来てから、子供たちがよく挨拶してくれるので、大人は子供たちに『おはよう』だけでなくもう一言何か付け加えて言ってみよう。」ということがとり決められた。また、今までは挨拶を交わしていなかった島の人同士でも最近挨拶を交わす人が増えてきたというのである。

六月十四日、ホタルが大池近くに
いるというので、留学生に是非
見せたくて子供たちを誘ってホタル
狩りに行った。小川のほとりか
らみかん畑一帯に何百匹もの平家
蛭が、まるでシャンデリアのよう
にきらめいていた。子供たちは大
はしゃぎでホタル狩りを楽しんだ。
その様子がNHKテレビで放映さ
れたため、島内でもホタルが居る
のに気が付かなかった地元の人た
ちを驚かせた。

九月十五日、恒例の祝賀会が講
堂で挙行された。極端に高齢化の
進んでいる本校区では六十五歳以
上の老人クラブ会員が住民の約半
数を占めており、敬老会が最も大
きな地区の行事となっている。祝
賀会のあと、小学生の敬老作文の
発表では留学生二人も代表になり、
地区のおとしよりが自分たちに温
かくしてくれるので大変嬉しいと
感謝の言葉をのべ、盛んな拍手を
受けた。続いて小学生の出しもの
では、沖縄の亮太君が石川音頭を
踊り、万雷の拍手を浴びた。それ
以来、亮太君は地域の人気者とな
り、地方祭でもみこしについて回

りながら、あちらこちらで踊って
好評を博した。

特に地方祭での異変は、留学生
のおかげで十数年ぶりに子供みこ
しが出て、祭りが賑わったことで
ある。最近では子供の数が減ったた
め、子供みこしを出すことができ
ず、倉庫にしまったままであった。



いのこもちをついて

それが今年には留学生パワーで子供
みこしを出すことができ、大人み
こしといっしょに祭りを盛り上げ、
地区民に大変喜ばれた。

十一月十六日、亥の子。この日
ばかりは子供たちが主役である。
六く七人がグループになり、夕闇
迫る頃、部落中を一軒一軒回って
軒先でめでたい「いのこもち」を

ついでお祝儀をもらうのである。

昨年までは子供の数が少なかった
ためグループしかできず、全戸
を回ることはできなかった。とこ
ろが今年には留学生のおかげで昔の
ように三班に分かれ、それぞれが
受け持ち区域を回ったので、殆ど
全戸で「いのこもち」をつくこと
ができた。子供たちは住民から喜
ばれた上、多額のお祝儀をもらっ
て満足そうであった。特に留學生
にとっては、都会にはない伝統行
事なので大変楽しそうであった。

この外、運動会や学芸会には留
学生の保護者は遙々来島し、家族
や親戚、知人まで誘って来て、島
の生活を楽しんで帰っ
た。

このように留学生
を受け入れたため、
地域の伝統行事が復
活したり、活性化し
たりして、地域住民
に与えた影響は少な
くない。

特に、直接子供を
預かっている里親宅
では、我が子以上の



そろいのはっぴで運動会に

気配りと愛情で子供たちに接した
ため、実の親子のように慕われ、
家庭生活が充実して生き甲斐にさ
えなってきた。恐らくこの子
供たちとは生涯を通じての交際に
なるものと思われる。

以上、留学生を受け入れたこと
によって、本校教育活動に充実と
活性化をもたらしただけでなく、
この地域のもつ潜在的な教育力見
直しのきっかけを作ってくれた。
そこで今後は、教育の島をめざ
し、物（自然）と心（人間関係）
の両面にわたって一層環境を整え、
シーサイド留学制度の益々の発展
に尽くしたい。

育つまちづくり戦士たち

シナジー効果を生み出す新居浜の異業種間交流

新居浜市企画調整部政策研究室
政策研究係長

森賀 盾雄

1、進む異業種間交流

新居浜市に株式会社インキュ21という会社が登場したのは昭和62年5月11日である。その後、昭和63年3月17日に新居浜テレビネットワーク株式会社というCATV事業会社が登場した。あと、パン通信グループ『南風』、まちづくりボランティアグループ『新居浜アメニティ倶楽部』などの異業種のメンバーが集まって活動を続けている。それらのグループは鎖のごとくどこかで繋がっている。それに、新居浜市を新たなまちづくり、産業起こしのフィールドとして捉える若い（主力30才から40才代）志士たちが牽引力になっている、約百名程度の主力人材が立ち上がっている、ともいえる。ようやく、まちづくり仕掛人が

点から線、線から面への展開となってきた。仕掛人が行う仕掛も

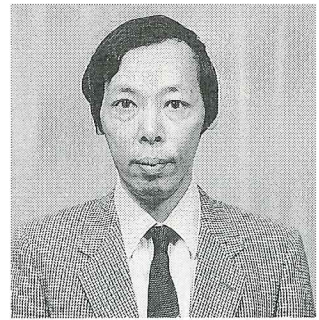
いよいよ新生新居浜市への基盤的流れを変える課題とも直面してくる時期を迎えつつある。新たな展開局面に立ち、最近の事例から報告をしてみたい。それと、インキュ21を中心とした若干の総括と。

2、四国初の理想的

『テレコムプラザ』の建設へ

異業種間交流の形もさまざまである。また、それでいいのである。昨年5月に急遽集まった『新居浜テレコムプラザ建設推進協議会』も情報化の異業種間交流の組織といえる。

新居浜テレビネットワーク株式会社（NTN）がCATV事業を計画する中で放送センタービルの建設という要因が前段にあった。



森賀 盾雄さん

昨年4月に四国電気通信管理局の人が郵政省の施設説明に新居浜市役所に来たが、様々なパンフレットを見ている内に、民活法の特定第4号施設で『テレコムプラザ』というものがあり、『これは、CATVの放送センターと抱合せて作ればどうだろう。わりと、規模的にも小さくても認定をうけれそうだ』と思い、NTNの社長に提案した。（その時に私は『新居浜のCATVは、インテリジェントシティの指定は受けているものの、この指定では無利子融資ないぞ。せめて放送センタービルでも無利子融資をとろうか』と考えた。）

5月にさっそく『推進協議会』を設立。情報関係異業種、NTN、株式会社アイ・シー・シー、株式

会社四国テクニカ、株式会社ライトウェル、IBM、日本電気、新居浜計算センター、住友電工、パソコン通信グループなどに加えてオブザーバーとしてNTT、四国電気通信管理局、四国電力、新居浜市。私と都市計画課の課員二人がオブザーバーで市を代表して参加した。

昨年末まで精力的に会合を重ねた（13回）。議論の柱は①どのような機能を持たすか②建設場所の確保③申請作業であった。建設場所については、新居浜駅の西隣の住友化学の所有地内をめざし、住友化学と交渉。機能面では、先行テレコムプラザの視察（山口、熊本、富山、水口）。情報関連各社が、新居浜の情報化拠点建設をめぐって楽しく議論し、共通の目標に向かうということは始めての経験であった。それも、郵政省の担当が『新居浜のテレコムプラザの出来方は民活法の趣旨からも、他の先行テレコムプラザが行政主導型であることを考えても、全く理想的である。初めて郵政省が自信

を持って紹介の出来るものです』との過大な評価を受けている。

現在、申請書は正式受理されており、建設場所も決り、建設業者も大手3社の共同企業体に決り、来年3月末完工を目指し進んでいる。既に情報各社のテナントスペースも埋まり、郵政大臣の認定間近となっている。やろう、と考えると9ヶ月―正に電撃的な作業であった。やはり、新居浜市は底力があるなあ、とつくづく思う。結局、いい企画、いいマネイジメント、いい人材を集めれば、爆発的な力を発揮出来るものなのだ。新居浜に今までにないすばらしい建物(建設費10億円建設主体NTN)が駅の近くに立つ。今後のまちづくりの呼水になることだろう。

3、活性化への具体的保障としての異業種間交流戦士

新居浜市はテクノポリスの副母都市、インテリジェントシティの指定も受けており、さらにテレポートの指定も確実となってきた。別子マイントピア観光開発も始動。

それらの成功の保障は地域に蓄積されたこれら異業種間交流戦士の人材であることは間違いない。インキュ21にしても、NTN(現在83社参加)、パソコン通信にしても、安易に市の外部によりかからず、たとえ稚拙なものであっても地域で学習し、試行錯誤しながら進めることを基本にしてきた。あの昭和61年1月に実施した『新居浜産業技術フェスティバル』以来、その点を頑に重視してきた。もちろん、だからといってグローバルな観点、積極的な外部との提携を拒むものではない。地域内部の力と必要な外部の力の連携である。

新居浜市は、いま市の新たなパラダイムの形成に向けて錯綜している。新居浜市の「育つまちづくり戦士」は、日本の産業転換の基本線と離れず、微力ではあるが挑戦し続けている。まさに、メシの種と離れずに楽しんでる。今までは、十億プロジェクトに挑んできたが、これからは百億、二百億プロジェクトに挑むことになるだろう。まさに、歴史的転換に挑む

時期を迎えている。

4、新居浜市の異業種間交流の経験から(教訓)

(1) 時として市職員よりもはるかに『まちづくり』の学習者、オソリシティが外部、民間で従来の殻を突き破って登場する時代である。

(2) 市職員の立場を十分認識して、あの手この手でまちづくりを仕掛けてくる柔軟な外部、民間人が登場する時代である。

(3) 新たな発想のためには、時として破壊しない程度の意識的ゆさぶりが必要である。

(4) とうとうと『何故出来ないか』ということのみを説明する人(行政内外)がいるが、これは不幸なことである。

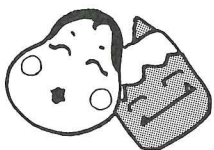
(5) 小さなプロジェクトでもグローバルに世界的視野に立

たないと少しも進まないこともある。例えばコンピューター学校の成立の採算性(マーケティング)は全国にネットを持つ学校が考えるのと松山だけに足場を持つ学校では違うということ。

(6) いくつもの異業種間交流の存在は、前向きの競争力の誘発になるし、シナジー効果を発揮する。

(7) 仕掛人というのは、いつでも、初めて会っても何の垣根もないものである。

(8) 『まちづくり総合センター』と新居浜異業種間交流戦士の間には何の垣根もない。同行の士である。



愛媛トイレ文化研究会と 地域間交流

TOYO設計&地域計画研究所所長

豊田 真喜男

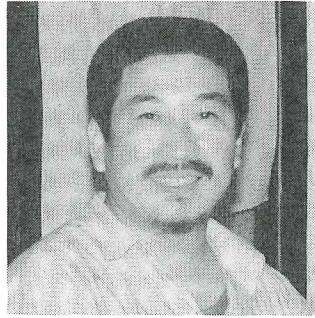
昭和六十三年春、瀬戸大橋が開通し、四国は新時代を迎える。

新しい四国活力創造の原点は、人及び情報の交流であり、行政、産業、研究者などの、交流母体の形成が重要であり又その交流分野は広く、時間をかけながら継続的に積みあげていくことが大切であるという観点から、四国四県の人、四国に関心を寄せる人達で、ゆるやかな交流会をもとうということ、昭和六十二年十一月に、高松で第一回会合がもたれた。

この会の参加者は、国・県・市町村の職員、研究者等バラエティに富み非常に楽しい雰囲気、四国の国土、これからの課題などについて立場を越えて自由に語り合った。

そして、四国八十八霊場のトイレをテーマに次も会を継続させることを申し合わせた。そして第二回の会は六十三年二月に徳島市で

もたれ「四国八十八霊場のトイレと地域振興を考える」テーマの元活発な議論が展開され、四国の地域振興を考えていくしくみづくりを行おうという提案がなされ、四国まちづくり研究会が発足し、昭



和六十三年春、瀬戸大橋の開通を迎えるにいたり、多くの人が四国にくるようになった。

課題は、瀬戸博後であり、魅力あふれ、活力ある四国をつくるためには、産業、文化をつくり、四国からオリジナルな情報を発信する新しい人の交流により、新し

い連携を形成していくことを模索しながら昭和六十三年七月に、トイレは、生活文化の一部であり、アメニティづくりの基本であるという認識のもとに、トイレをつくる人、管理する人、利用する人それぞれが力を合わせて、新しいトイレ文化を創造し、トイレの社会的位置づけの向上、都市空間や生活そのもののアメニティが求められる中で「出口の文化」を楽しく語らいながら新しい「文化の入り口」を模索していくことをめざし「愛媛トイレ文化研究会」が発足した。

「汚い」、「臭い」、「暗い」、「怖い」とは公共トイレにつきまとうイメージ。これをトイレの四Kと呼ぶ。公園などにはピタタリのトイレが多く、あまり利用されていないのが現状である。

しかしトイレだって街の顔。4Kから脱皮し快適でユニークなトイレを街につくろう、又景観を配慮したデザインによる街のくつろぎの空間を考えよう、たかがトイレだが、人間にとっては大切な空間。快適なトイレばかりでなく

人々の交流を通して、トイレを切口に街づくりを考えようと、食談形式で数回うんちく論を展開し、現在にいたっては会員数も八十名を数える程になっている。

会員の中には、大学教授、医者、マスコミ関係、行政マン、建築家、トイレ関係のメーカー、まちづくりプランナー、等々がいる。この愛媛トイレ文化研究会が今後の交流の新しいあり方のような気がしてならない。又「愛媛トイレ文化研究会」をはじめ高知には「くさい仲間」徳島には「徳島公衆便所研究会」香川には「女性のトイレにわか研究会」といったグループが次々と誕生しトイレ文化を考えることを通して人の輪が広がっている。

このトイレ仲間が昭和六十三年八月に、四国の六市町村で開催した四国八十八時間シンポジウムを計画し、さまざまな角度から四国の活性化について話し合う一方、トイレ文化の議論を拡大、発展させた。

瀬戸大橋は、四国の一体化を進める一つの契機。今こそ四国の人材ネットワークが必要ではないか。

人々の交流を通して、四国の将来の道を探っていくと、四国まちづくり研究会は八十八時間シンポジウムやトイレシンポジウムの人的交流をベースにし、四国の国づくりを考える交流の場でもある。

「よく来たなあ、まあしゃがめ」そして「右を見る」と指示がある。その通りになると「左を見る」と書いてあるので左を見ると、「うしろを見る」とある、体をまげてふりかえると「キョロキョロするな」「馬鹿」「うしろを見て用がたせるか下を見てしろ」又「神(紙)がなければ運(うん)を手でつかめ」と、誰が考えたかは知らないが傑作である。長い時間あの狭い臭い空間で芸術作品を作りあげる苦勞黄金文字ともいわれトイレに大作品、一つの執念ではなからうか、急に臭い話で恐縮すがごめんなきい。

トイレというものは毎日ご厄介になり、気にはしているものの迷惑施設と考え、トイレのことを話すといやがられるし、馬鹿にされる、そのくせトイレが汚れていれば文句をいう、自分で作って、自

分です糞便の処理に自分が悩む。

まさに自業自得である。人が生きている限り、その始末には責任を負わねばならない。食べる方には、グルメだとか、エスニックだとか言ってるくせに、出してしまえばすべて終わりだと考えている無関心の人が多すぎる。

人間が自分自身と交流できるのが糞便でありトイレである。排便の生理と消化のしくみで健康チェックができる。トイレのマナー、排水や汚水処理の問題、紙と水との有限論、トイレの神様仏様とかトイレ犯罪等々書き表わせない程たくさん交流がある。

また最近、人々の公共トイレへの関心が高まってきた。トイレ関係の本が売れたり、トイレの日(11月10日)まで作られ、トイレシンポも盛んである。トイレの話もちたせば誰もが一言言をもって参加でき、話が尽きることがない。

自治体の中にも、これがトイレかと思まちはえるばかりの斬新なデザイン、新感覚のトイレをつくり公共トイレに積極的に取り組む姿勢がでてきてトイレにも目の目が当たるようになってきたといえ

る。トイレを見ればその家のマナーがわかるように、公共トイレを見ればその街の文化度がわかるというものである。

現在、愛媛トイレ文化研究会では、自治体との連絡もとれ、野村町あるいは川之江市の公共トイレを考えるワーキンググループをつくり活動を行っている。

今後トイレ文化を語ることによる、アメニティ空間、ライフスタイル、新しい地域文化を考え、あえるいは、人的交流を深めたいと考えている。

最後に、四国の公衆トイレの現状をうたった歌を紹介します。

「金をかけずに、片隅に、
汚く臭く薄暗く、
一大決心用足せば、
壊れたドアを手で押さえ、
飛び交う蚊蚊に先制攻撃、
怖い孤独な公衆トイレ」

笑えて笑えないのが現状である。

トイレとは言うまでもなく排泄の場所である。しかし日常生活を振り返ってみると、我々は自分で

も意識しないうちに、トイレに様々な機能を求めている。トイレは日常生活の中で数少ない一人になれるステーション、そして思索、安らぎ、落ち着きを取り戻すなどの場として利用される、又トイレはみんなの場所でもある。訪れたオフィスビルでトイレを借用しその清潔さや心配りに会社の印象が良くなったことはないだろうか。トイレはその会社の顔ともなり、外部の人に対するもてなしの心を伝える媒介にもなる。

レストランやデパートでトイレのきれいな店は繁盛する。観光地や地方都市を訪れた時、トイレがその街のイメージを決める要因になることもないとはいえない等々考えると、トイレも交流のステーションと考えて不思議ではない。

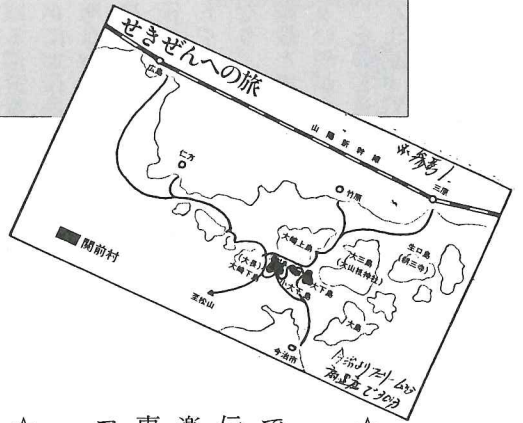
地域づくりを考える時、様々な立場の人達の交流と連携を図らなければならぬ。トイレを話題にし、トイレを切口に地域づくりを考える愛媛トイレ仲間、地域づくりの仲間の輪が広がることを期待して置筆。

元気 印 レポート!!

夢の仕掛け人達

せき ぜん ゆめ く ら ぶ 『関前夢倶楽部』

島崎 義弘



☆夢づくり

こんにちは、「関前夢倶楽部」です。昨年四月、関前の古き良き伝統を守りながら遊び心を持った楽しい活動を通じて田舎で生きる事の価値を見つけ出すことをテーマとして作られた倶楽部です。

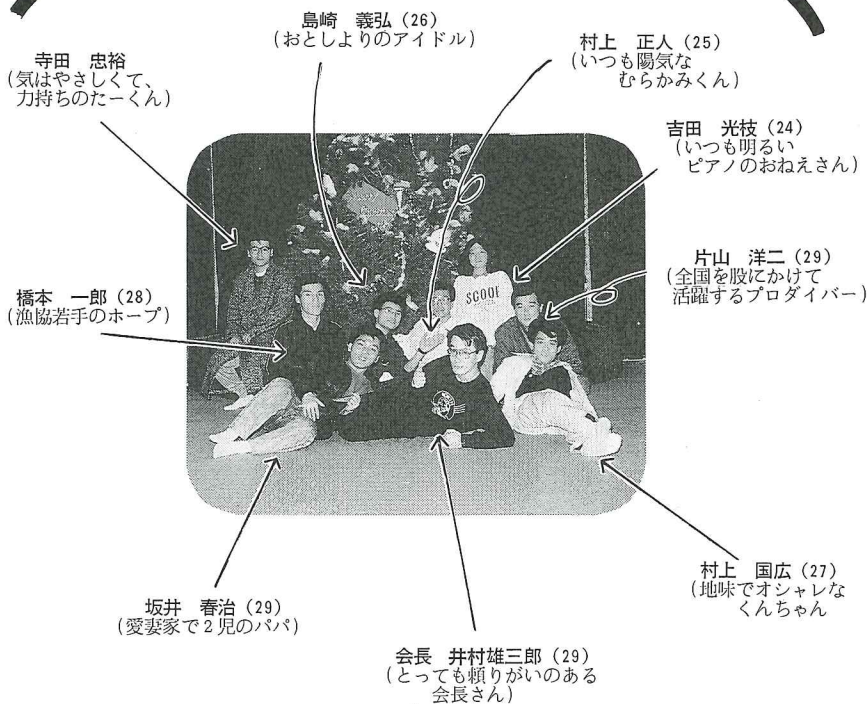
☆私達の住む関前村

関前村は、愛媛県の最北西端、芸予諸島のほぼ中央に位置し、岡村島・小大下島・大下島の三つの有人島からなり、今治市へ、フェリーで六十分、高速艇で三十分の所にあります。現在人口は、約千四百人です。関前は、みかんと魚の島として発展をつづけ、春は桜夏は海水浴・釣り・キャンプ、秋から冬にかけては、みかん狩りと四季のレクリエーションに最適な瀬戸内海国立公園の景勝地です。

☆関前夢倶楽部発足

発足のきっかけは、昨年の春頃

関前・夢倶楽部の仲間たち



同年代の仲間同士が互いに関前の夢を語り合う中で「もっと関前を多くの人達に知ってもらおう」・「多くの人達に訪れてもらい関前の歴史・文化・自然に触れてもらおう」

「メンバー紹介」

「おう」そして、私達自身も関前の古き良き伝統を守りながら、遊び心を持った楽しい活動を通じて、田舎で生きる事の価値を見つけ出そうと、ごく自然に生まれて来ます

関前・夢倶楽部の仲間たち

した。会の名前も、会員一人一人自ら、夢の仕掛人になろうという事で夢倶楽部と名づけました。現在は、会員九人、全員二十代で、頑張っています。

☆夢活動

昨年の四月夢倶楽部が発足して十ヶ月が過ぎようとしています。その間、「老人ホーム慰問・環境美化・夏祭り・子供達の夢づくり」等、活動をしました。

その中でも、「関前にしかできない、島にしかできない何か」をテーマに今治の「ありんこの会」と共に、今治市にある養護施設



▶夏体験

一日塾 IN SEKIZEN

現在までの活動状況と今後の予定

- 3月 有志が集り発足の準備に取り掛かる。
- 4月 設立総会
特別養護老人ホーム『泉荘』への慰問（今治市）
- 5月 青年団の害虫防除活動に協力
- 7月 『ありんこの会』のキャンプに参加（今治市）
国立公園『観音崎』と海水浴場にゴミ箱を設置
- 8月 夏祭りに夜店をだす。
夏体験一日塾in関前
青年活動交流事業に参加（関前村）
- 9月 青年団の害虫防除活動に協力
秋祭り行事
- 10月 青年活動交流事業に参加（肱川町）
- 11月 子供達との『クリスマスパーティー』
- 1月 新年会
- 2月 年間活動報告書の作成
- 3月 年度末総会

今後の課題

- ※ 幅広いネットワークづくり
- ※ I LOVE 遊ING!

の子供たちを招いて、「夏体験一日塾 IN SEKIZEN」を開催しました。当日は、ゲーム・釣り・すいか割り、そして、メンバーが苦労して仕掛けておいた「立て網」による魚とりなど、関前の夏を楽しんだ子供たちは、最高の笑顔をしていました。

また、十二月二十四日は、関前の子供たちを招いて、「クリスマス会」をしました。今回、私達の夢でやりたかった事、飾り付けの

目玉として、当日までの雰囲気盛り上げる為、巨大な「イルミネーションツリー」を離島開発センター玄関前に点灯させ、屋内には、天井まで届く大きなツリーや壁面の飾りつけをしました。当日は、「レクリエーション・サンタのおじさんのプレゼント・キャンドルサービス」などを行いました。子供たちの反応は、「島にサンタのおじさんが来た」と、大はしゃぎで、喜んでくれました。私たち



▲クリスマス会

も子供たちへの夢づくりのワン・ステップになったと、確信しています。

☆これからの夢づくり

故郷関前の村づくりに少しでも貢献できればと思いついた「夢倶楽部」の活動、その夢の仕掛人としての夢づくりの灯を消さないで、できるだけ多くの人の夢を語ってもらって、夢を見るだけでなく、みんなで、アイデアを出して実践して行くことが大切であると思います。

鉄の歴史村「地域づくり実践法」

— 島根県吉田村を訪ねて —

(財)愛媛県まちづくり総合センター

幸 地 慎

広島市と松江市を結ぶ国道五四号線を一路中国山地を越え、谷間のまち掛合町から少し入ったところに吉田村がある。

人口二、八四〇人、面積一一六平方キロ、九〇%が山林の小さな村が、昭和六〇年(株)吉田ふるさと村を設立、以来、昭和六一年三月「鉄の歴史村」を宣言、昨年十一月には(財)鉄の歴史村地域振興事業団を設立するなど、本物の地域づくりに向けて大きな挑戦



藤原専務さん

を続けている。

役場の企画振興課と事業団の事務局のある一室を訪れると、議会中にもかかわらず時間を裂いていただいた藤原 洋専務さん(役場参事)と事業団の総務企画部長の田部さんに案内され、今夜の宿泊先でもある役場から一キロほど奥まった「吉田グリーンシャワーの森」の閑静なコテージに着いた。こたつを囲み、地酒をかわし、さながら山ごもりの夜長談義といった雰囲気だ。藤原専務さんの地域づくり論を伺えたのは大変幸運であった。

以下、その内容を紹介しながら今、地域づくりに求められているものを考えてみたい。

● まちづくり

むらおこしの本質

「いま言われているまちづくり・むらおこしは、理論や実現性・企画力に乏しいものですべてが一緒になっているように思える。

地域づくりの運動論を唱えれば、それが生活の隣の問題だから何でも言えるが自分で出来ない人が多すぎるのではないか。『なかよし論』や『運動論』に終始している例も多すぎる。』と前段から手厳しい言葉が・・・。

確かに全国各地からマスコミなどを通じ話題や情報が溢れあたたかも「流行り病」の様相を呈している。そんな時だからこそ言葉としてではなく地域自身が何をなそうるかが問われているのだろう。また、「やれるところからやっていた、いけばよい。」といった理論的裏付けに乏しい実践や、そのみ主張する仕掛け人でもないけない。単なる観念論で終わらない。妥協を許さない厳しさを感じる。

● 地域づくり企画

実践の為の「一流づくり」

「地域づくりの実践は企画の段階でどれだけレベルアップできるかにかかっている。それは自らのレベルアップをはかる事と、この期間に人材がどれだけ養成できるかである。

この段階で安易にコンサルタントなどに依頼することは、実践を伴わぬ彼らと実践していく私達にレベルの差が生じ、結局本物にならない。だからこそ実践する側が理論的、知識的レベルアップを目指し『その分野では一流の人材』を地域にむかえ、その人達とどう関わり、どのようなネットワークを築いていくかが大切になってくる。』と「一流づくり」を強調される。

企画する以上は、「絵に描いた餅」にならないようまず、自らを徹底して鍛えあげておくことが大切なのだ。(財)鉄の歴史村地域振興事業団の案内パンフレットをみて驚いた。参画している役員・

理事はその分野ではまさに超一流の文化人、経済人なのである。

●実践者として

「住民の総意を得なければ成り立たない事業ならば返って本物になりにくいのではないか。」といわれて一瞬なぜかと思った。が、話を聞いていくうちに行政マンとして村の企画・実践のプロたらんとする「想い」が伺えた。

「住民総ぐるみ」は施策を受けようとする側には響きのよい、納得しやすい言葉かもしれない。しかし、地域を経済活動が繰り広げられる一つの経営体とみれば、内に経済の流れを創造していくという「生み」の苦しみと同時に、「外部競争」という風雪にさらされるに違いない。これは実践していくこうとする者の持つべき責任感と覚悟のように受け取れた。

「地域づくりの実践では『原因のあるところをどう改善していくか』であるが、例えば若い人を地域に残そうと対策を考えるとき、

所得のある産業、職のある地域づくりよりもむしろ『楽しい消費の場』の創出が大切だ。」といわれる。

それはある意味で閉鎖的な社会である地域に経済循環を起こすためにはまず需要を産み出す事であり、しかも、それは文化性に富んだ質の高い「遊び」の要素が要求されるのである。

もうひとつ心掛けたことは、対策なり解決方法を考えてから課題や問題に当たっていく積極進取の姿勢であり、これは実践しながら知識や理論を身につけていった藤原専務さん自身の経験がそう言わせるのだろう。



菅谷たたら山内

●吉田村の「むらづくりコンセプト」

地域づくりの要は行政というところで、次のような内部の行政改革を決定している。

- ①職員の一〇％削減
- ②補助金支出の三〇〜五〇％削減
- ③現業部門の民間委託
- ④事務部門の電算化

これらの施策で予算の二五％削減を実現し、スリムで強靱な体制をつくり上げた。

もちろん、始めから円滑に行われたわけではなく、特に人員の削減については労働組合との話し合いの中で「吉田村を残すのか役場を残すのか」といった議論を尽くしている。

公・民を問わず一つの事業を起こし、外へ向けて発信しうるにはまず内の体制づくりがどれだけしっかりとできるかが大きな鍵なのである。

吉田村の事業の中心となつていく「鉄の歴史村」のコンセプトは

「そこにしかないものは地域文化であり、それを豊かな知性と感性で現代に生かしていくこと」である。そのためこそ企画・実践をおして創造していく者の感性をどう育てるかが大切となる。

『文化で飯が食えるか』ということに対しては『企業においてもこれからは文化性がなければ生き残れない』という意味で、単なる機能や利便性、経済性のみでない新しい付加価値の創造力が問われている。また、各地で取り組まれている特産品づくりについても、『製品』と『商品』の違い、つまり、作って、売って、採算がとれ、しかも再生産が可能となるような経済がもつと追求されるべきだ。』との理論は明快である。



●二世紀に挑戦する吉田村

吉田村の振興計画には大きく三つの柱がある。

①「鉄の歴史村」の建設による文化振興、②地域間交流事業の推進による経済の活性化、③長寿社会と生涯学習による定住対策である。

ここでは、現在どのような挑戦が実践されているか、いくつかを紹介してみたい。

①では文化遺産の保存と公開、鉄の歴史村の施設整備、(財)鉄の歴史村地域振興事業団の設立によって、村中を博物館にしていこうという試みである。

中でも、事業団が進めている和鋼生産研究開発事業では、和鋼の持つ「錆びにくい鉄」という特性を科学的に解明しその技術開発を進めている。これは、一つには新しい鉄の歴史が創れるかどうか、二つには従来の釘をその特性を生かして文化財の修復に応用することによって和鋼そのもののイメージアップや一般住宅への販路開拓

といった可能性に期待している。

この事業を進めていき、将来の地域産業として発展させるためには技術開発や高付加価値的な戦略がなければ地域づくりには貢献できないということである。



鉄の歴史博物館

鉄の歴史博物館といった施設整備は、日本文化の二大源流である「稲の文化」と「鉄の文化」を国際的感覚にまで高めていこうとする試みである。

②では「吉田グリーンシャワー

の森」と現在建設中の「オープン・エア・ミュージアム」といった交流施設での魅力づくりを進め、地域間交流による需要の創出と拡大を狙っている。その拠点として(株)吉田ふるさと村と現在、産業流通情報センターを整備している。

このため、地域における経済の活性化を実現するため、ものをどれだけ売っていくかという発想よりも、いかに人を動かすかといった「ファンづくり」が大切である。つまり、単なる産業振興にとどまらず、需要を発生させ拡大しそれからどう付加価値のある経営を目指すかが鍵を握っているのである。

③の定住対策については、三年前から取り組んでいる生涯学習の村づくりや「やすらぎの里」の建設事業が建設省に認められ進められている。

藤原専務さんを囲んだの夜長談義は続いたが、日頃のフィールドを持たず地域づくりを識ろうとする私達にとってはまさにショック

の連続だった。

翌日は、吉田村郷土資料館の吉川館長さんと企画振興課の天根さんに案内していただき、鉄の歴史博物館、菅谷たたら山内施設、建設中のオープン・エア・ミュージアムでの和鋼生産研究開発施設などをこの目で確かめることができた。

私達が見たこと、聴いたことの一つひとつがすべて「地域に経済の流れを創出」するための本ものの地域づくりであることを識ることが出来たことは大きな収穫だった。

最後に、「大切なことは企画や計画は内部で必ずローリングすることであり、携わる人のレベルが向上し、地域を取り巻く環境も変化していく中では、ローリングによって改善されるべきだ。」という秘訣と、何よりも心強いのは、「地域で懸命に私達のような挑戦をしようとする人材を是非これからも探してほしい。」との励ましの言葉であった。

モンドラゴンを訪ねて PART II

—モンドラゴンとアリエタ神父—

(財)愛媛県まちづくり総合センター 近藤 誠

○ モンドラゴン協同組合とは・・・

前号の総括

前号では、モンドラゴン協同組合の組織の概略と特長を、一次組合のファゴール・エロスキー、二次組合のCLPという具体的事例を見ることにより報告した。

そのことにより、十分ではないにしても、モンドラゴン協同組合の輪郭はわかって頂けたのではないだろうか。

ここで、もう一度整理しておくならば、モンドラゴン協同組合は、労働の協同体の思想によって統一され、自己雇用型の労働者生産協同組合を基礎としており、一つ一つの協同組合は小さく独立しているが全体としては束になった蜂の巣状の構造で、物財の流れだけでなく、組合員が相互に支え合う内部吸収力の強い構造になっている。

今回は、モンドラゴン協同組合の根底にある労働の協同体の思想を考えてみたいと思う。実は、この労働の協同体の思想こそ、ドン・

ホセ・マリア・アリスメンディ・アリエタ神父(一九一五〜一九七六)の思想であり、アリエタ神父との時を越えた出会いが、今も私の中に強く残っている。

○ アリエタ神父との出会い

「アリエタ神父は、いつも、閉鎖された自由の中でも、自分を発見し、発揮することをずっと考えていた。」というヘスス・ララニャガ(ウルゴールの5人の創始者の一人)の言葉は、現在を生きている私に大きなショックを与え、過去の人物であるアリエタ神父との「出会い」へと誘った。

形ある物は、いつかは壊れるときがくる。同じように、人には、必ず死がやってくる。しかし、人の「意識」や「理念」といったものは、人が生きているかぎり、脈々と息づいているのである。

アリエタ神父の思想は、時間を越え、このモンドラゴンで生き続けており、そして今ま

た、空間を越え、日本人である私とその思想に感動していることに、何とも言えぬ驚きを感じるのである。

結局、今ブームになっているまちづくりにおいて大切なことは、物を作っていくことではなく、その土地で生きていくことの「意義」や「価値」を築いていくことではないだろうか。そうでなければ、現象は、一時期のものでしかなくなり、後には何も残らないということの繰り返しになってしまうような気がするのである。



アリエタ神父

○ モンドラゴンの歴史とアリエタ神父

モンドラゴンの歴史は、市民戦争の直後・一九四〇年にアリエタ神父が、モンドラゴン協会の司祭補として入ったことから始まる。バスク地方の独立を願うアリエタ神父は、

その自立の基礎を労働と教育に求め、若手を集め、バスクの地場資源と技術を活かして、地域の推進となる会社を作ろうとした。

そして、そのために彼は、一九四三年、古い伝統的なギルドから青少年を切り離し、独自の技術学校を興し、二十人の青年相手にそこで教育をはじめた。

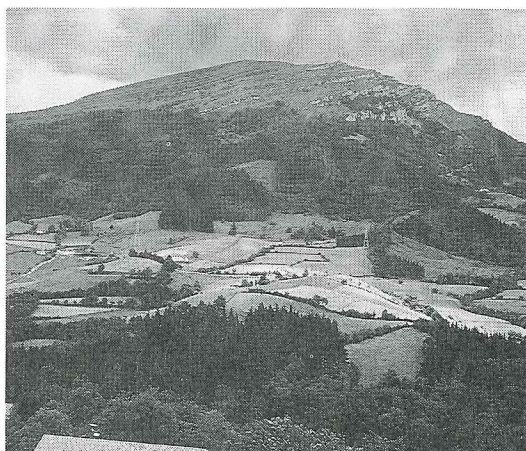
その後、最初の協同組合「ウルゴール」が設立するまでに、十三年間という月日が流れるのである。

その間、アリエタ神父は常に助言者であった。学校は、技術習得のための学校であったが、実的な必要の中から、経済学・社会学・経営学（財政的）などを学習したのである。

そして何よりも大切なことは、「労働とは何か」といったような、精神的な学習を行ってきたことである。

現在に至るまで、この教育の重要性（技術習得のみでなく、必要に応じた学習と精神的訓練）は、モンドラゴンの精神構造の中心的役割を果たしているといっている。

また、モンドラゴンでは、教育文化連盟を作り幼稚園から大学までの学校教育に関わっている。このように、人材養成に関する意識の高さは、経験からくるものが大きいような気がする。



田舎の風景

○ アリエタ神父の思想

アリエタ神父の協同組合観は、企業は経済の中でコストの低減を図る活動を行い、社会の進歩と調和に役立つ利益をあげ、実際に適応する組織を作ること、人間性の実現のために、労働を通じて人間の団結と参加を試みるものであって、人間の完成の手段でなければならぬということの二つである。

この考え方を中心に、実際の組織づくりが行われている。その特長を二つほどあげるならば、一つは、組合内の相互協力であり、もう一つは、労働と資本の機能に応ずる報酬の配分である。

一つめは、協同組合の機能を全体として発揮するために、不足する分野は協同組合のグループで相談して新たな組合組織として設立し、互いに機能的に補完し合ったシステムを創造することを意味しており、自分たちの必要性から新たなものが生まれてきているのである。このことは、CLPなどの二次組合の創設に顕著な例として表れている。

二つめは、モンドラゴン協同組合が、自営者の協同活動体という形態を自分たちの協同組合の本質としており、協同組合における個人の持ち分と団体としての組合の共有財産との二つの概念を持っていることを表わしている。

ここで、考えたいのは、組織づくりもさることながら、協同組合そのものが人間完成の手段でなければならないという考え方である。つまり、労働を通して人間性を実現しているというのだ。

そして、このことが、私とアリエタ神父の時を越えた出会いへと誘った言葉「閉鎖された自由の中で、自分を発見し、発揮する」ということではないだろうか。

「閉鎖された自由」というのは、与えられた場所・生まれ育った環境・風土・歴史そのものではないだろうか。特に、バスク地方という独立意識の強い歴史を持った地域では、

この意味がなおさら重要なものとして受け止められる。

その中で、自分を発見し、発揮するということは、

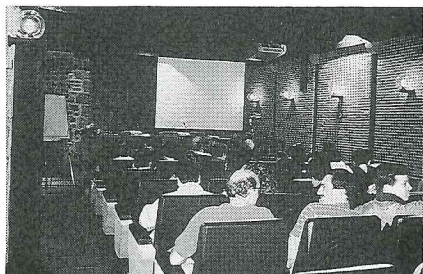
閉鎖された自由の中に閉じ籠もるということではなく、既存の体制を打ち破っていくことになるのではないだろうか。

結局、発展していく過程において、自分を発見し、発揮していくことが一番大切な要素になるであろう。

ヘスス・ララニヤガは自信を持って、「モンドラゴン協同組合は、資本に力があるのではなく、協同組合の人に力があるのだということ」を強調しておきたい」と言った。人の意識をどう育てていくか、どちらにしても人そのものの問題なのである。

そして、人の意識としての到達点が、「閉鎖された自由の中で、自分を発見し、発揮することを考える」ということではないだろうか。

もう一つ、アリエタ神父の興味ある言葉で、「知は力なり。知の社会は力の民主化なり。」



研修風景

というのがある。これは、モンドラゴン協同組合の中で息づいている思想であり、真の独立を目指そうとするならば、今後、この考え方が根底になれば難しいのではないだろうか。

言い換えるならば、「強制」ではなく、「共生の意識」で人々をネットワークしていくための根底に必要な理念が、「知は力なり。知の社会は力の民主化なり。」ということだと思ふのである。

「地」（土地・地域）でも、「血」（血縁関係）でもなく、「知」によって結ばれていく社会が、今語られているネットワークによる地域社会づくりではないだろうか。

そのためにも、「知」に対する学習をしっかりとっておかねばならないし、「知」による社会を形成していかなければならない。ただし、「知」に対する意識が固定化してしまっただけではいけないだろうし、共生の中から「知」を見出だしていかなければならないと思う。それでは、一体「知」とは何であろうか。単に「知ること」ではなさそうである。確かに、「知る」ということは、第一歩であり大切なことではあるが、それよりも、学習を通して、「共通の理念」や「共生の意識」を作っていくこと、あるいは、見出だしていくことではないだろうか。生きる・働くといっ



▲スペイン語の卒業証書



た日常的な生活の中で、「儲ける」とは少し違った共通の価値観を養うことが、ここでいう「知」ではないだろうか。私にとって二度目の海外旅行は、遠く離れたスペインのモンドラゴンを訪れることで、「人」の大切さを改めて考えさせられた研修旅行であり、アリエタ神父という素晴らしいリーダーとの時を越えた出会いが、とてもうれしく感じられた「旅」であったことを最後の報告としたい。

E N D

「女性が語ろう」 まちづくりの集い」雑感

(財)愛媛県まちづくり総合センター

山本 幹 男

「元気印女性」集合

生活に元氣、地域に元氣している県内有志の女性の集いが、去る十一月二十六日(土)松山市で開催された(当センターが呼び掛け主催)。

この集いは、女性の方々だけではない、この集いは、「地域づくり」について、愉しく話し合って頂くことを願ったものである。この出会いを生かした友達づくりと、地域で頑張る元気印女性の「力の秘密」を学ぶこと、そのうえで、多少なりとも今後のセンターの進むべき道への御提言を期待したのである。こんな願いを持って、小生も担当として、所長の号令の下、センターの日頃の活動から手繰り当てた三十人の愛媛おごじよに声をか

女性語ろう、まちづくりの集い出席者

氏名	市町村名	所属・勤務先等
檜垣 幸子	生名村	ろうそく塾
濱田久美子	生名村	ろうそく塾
安井 節子	新居浜市	愛媛新聞新居浜支社
白石 和子	新居浜市	ゆにて設計事務所
井出サツミ	玉川町	町役場教育委員会
田村 純子	松山市	松山ヤングネットワーク
古野セキエ	中島町	町役場農業委員会
二宮三重子	双海町	町エプロン会議
河島 登紀	五十崎町	町づくりシンポの会

け、センター職員が分担してお伺いし、集いの趣旨等を御説明し、御協力頂いて、やっと九人の参加を得たのである。企画しても、参加してもらったことが、如何に難しいか、痛感した次第である。

小生のたわごと

ところで、話はちよつとそれるが、あきはかにも、当日の自己紹介で一つバッチリ決めようと、一週間も前から、「寝ては夢、起きてはうつつ幻の」の心境で、挨拶を考え始めたのである。よせばいいのである。

本も読みました。青木雨彦著「男の寝息・女のためいき」をひもとき(たまたま近くに、これがあっただけなんです)、何かないかと探しました。あったのであります。これぞと飛びつき、「これで自己紹介は決まり。」と密かに躍り上がる思いであったのである。

この本の記事の中に「朝の食事は、やはり御飯と味噌汁がいい。」があり、これがヒントになったのである。そして挨拶はこうである。

『唐突ながら、女性の語らいでひよつとすると出てくるもの一つに、結婚という話題があると思ふんです。考えますに、女性の幸福は、やはり結婚であわせない家庭を築くことではないかと思ひます。地域づくりも、家庭をしつかりと築いたうえで話だろうと思ふんです。結婚、最初は何といってもプロポーズですね。三十年前には「僕の朝の味噌汁を作ってくれませんか。」であったとか。二十年前は「夜明けのコーヒーを二人で飲もうよ。」でしょう。十年前は、さつそうと車で「愛のスカイラインで幸福のキューピットを二人で探しに行こう。」かな(これは小生の創作)、今の女性は、何でころつとまいるんでしょうね。そこら辺りのヒントをお聞きしたいな、などと考えております。ちなみに、『私は既婚ですが、よろしくお願ひします。』てな具合に言おうかなと思いついたのである。

ところが、あにはからんや、担当とは非情である。やれ配席がどうの、やれコーヒーの数がどうのと言うことで時間に追われ、いざ自己紹介は、なんと、名前を言うだけで終わりなのであった。こらおまえ、何ごたごた喋っているんだ。あつ、申し訳ない。集いの話でしたね。前段が長くなりま

した。御用謝、御用謝。

集い語録アトランダム

ともかく、小雪舞う土曜日の午後、集いは始まったのです。

先程の九人と話し合いのスパイスとして当センター運営委員の三人（亀岡徹、若松進一、守谷和久の各氏）とセンター職員との参加で
もって行われた。

以下、簡単に紹介させて頂きま

す。
双海の二宮さん、「私は、花づくりに燃えています。花は、人々の心を明るくします。花の嫌いな人はいないでしょう。双海の女性は、花づくりから町づくり、地域づくりをと、頑張っています。ますます花づくりを奨め、双海町を発信します。」と、心の奥で燃えている思いを話された。

そこへスパイスの亀岡さん、「花は綺麗？花は、もともと美しくも何ともない。綺麗とは、個人の心の中にあるものだ。一人よがりだ。そこら辺りをリアルに感じる目も必要だ。」と、一石を投じた

のである。

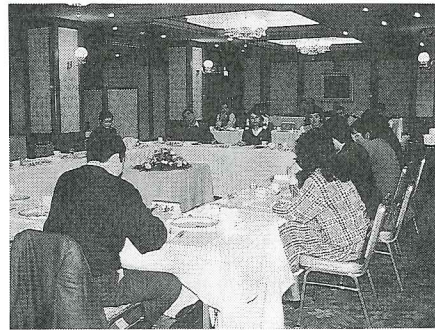
亀岡さんの「よもだ塾」で、五十崎で元氣している河畠さん、

「五年前まで、真面目で、控えめで大人しい自分が、よもだ塾で感化され、現在は、小田川を守る運動などに、どっぷりとのめり込んでいる。原っぱ朝市や生活雑排水の運動に参画（参加ではない）している。毎日、小田川を見ていたが本当は見えていなかった。今は、五年前とは全く違った自分がある」と訴えた。

生名村の檜垣さん、濱田さん、「村づくりとは？ろうそく塾で勉強している。何か、村おこしというものが、塾に係わっている人だけのものになっているような気がしてならなかったが、今日の話し合いの中から、今までの自分ではないんだと分かった。」と謙虚に話された。

他にも、愛媛新聞の安井さん、新居浜の白石さん、松山ヤングネットの田村さん、中島の古野さん、玉川の井出さん、それぞれの体験や思いを素直に話して頂いた。

スパイスの守谷さん、若松さん
激辛や甘口やいろいろ振りかけて頂いた。



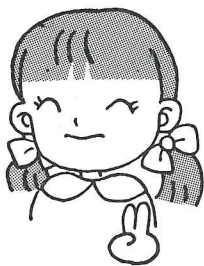
今後の方向・私見

まずは、やってみようと言うことで、この集いが、どういう方向に進むか見当も付かぬまま、なんとか出席頂いた皆さんの御協力により、第一回としては、活発な意見があった。ああ、なるほどと感心すること、ヒントになったこと、同感と思ったことなど、各人それぞれ、何か心に残ることはあったのではと、自己満足をしているこの頃である。

今や、日常生活は安定傾向にあ

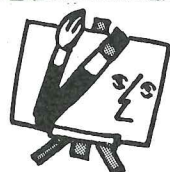
り、ゆとりや潤いなど、精神的な豊かさを享受したいと願う気持ち
が、人々にも高まって来ている。
特に、女性の感性が、このようなソフトのジャンルには、より重要な意味を持って来ており、その傾向は顕著になっている。

また、自由時間の増大や価値観の多様化等により、自分のスタンスで行動しよう、自己表現しようという思いから、女性の社会参加への欲求は、ますます盛んになっている。したがって、女性の積極的な提言や行動が、これからのまちづくり、むらおこしに重要な役割を担うことは、間違いない。
そこで、この集いもできるならば、随時開催し、様々な立場の方々に出席頂き、地域づくりへの熱き思いと御提言をと念願している。



心に残る風景

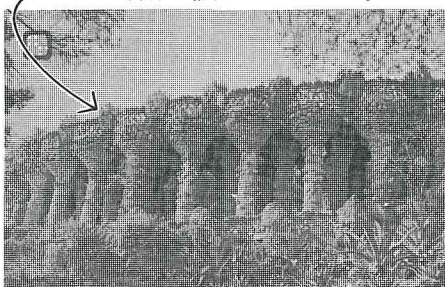
— バルセロナ —



バルセロナへの旅はこの旅行の中で最悪でした。ヨーロッパには長い夏休みがあるという事、マルセイユを夜中の汽車で出発した事、スペインの汽車は必ず予約する事ということをおぼえてた事、という理由でバルセロナまで一睡もできず、ペンションにたどり着くとぐったり。それでもなんとか近くの公園へ出かけてゆき、ぼけっとしながらもバルセロナの中につかっていた。

今回の旅行で、最初っからどうしても来たかったのが、このバルセロナ。アントニオ・ガウディで有名なサグラダファミリアはもちろんの事、ずーっと以前にサントリー（だったと思う）のCMで不思議なところ、どんな所だろうと思っていたグウェルパーク、その他コロンブスの像、ピカソの初期の作品がある美術館など、ここにいる5日間は本当に楽しめました。

この上の部分も散歩ができる道です



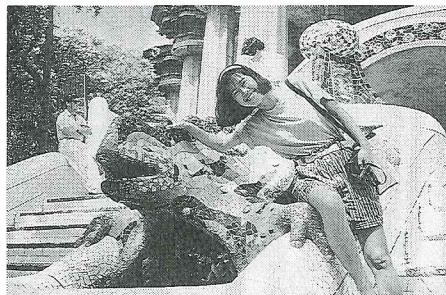
Parque Güell

あまりにも有名なサグラダファミリアは一日中ながめつづけてもあきないすばらしい建て物です。ご存じのようにまだまだ建設中です。このサグラダファミリアの陰に隠れてあまりめだたないけれどとてもすばらしい公園、それがグウェルパークです。これもガウディの作品です。この公園へは地下鉄を降りて、20分くらい坂道をいっしょうけんめい登ってやっとたどり着きました。あちらこちらにモザイク模様がちらばって、私たちを出向かえてくれたカメレオンくんもモザイクです。ここが不思議な公園の入り口。

とても広い公園の中をうろろろしていると、子供の手をひいたお母さん、犬の散歩中のおじさんがいて、なんかあれーってかんじ。モザイクのいすがとり囲んでいる広場でひと休みしているとさわやかな風とともにフルートの調べが。振り返ると10代の女の子がいっしょうけんめいフルートの練習をしています。そばにはレース編みをしているおばさんがいて。そういえばみんなそのへんの公園までお散歩に、みたいなかんじで、とても気負ってグウェルパークへというかんじではありません。なんか肩透しをくったみたいです。

ヨーロッパには公園が多いけれど、どこの公園でも芝生に寝ころがったり木陰で本を読んだりみんな思い思いに過ごしています。私にとってのガウディのグウェルパークはバルセロナの人（特にこの公園の近くの）にとってやっぱりただの公園だったようです。そうなれば今日は私もこの住人、好きにこの時間を過ごすことにします。（とは言ってもカメラを持った日本人ですから珍しそうにパチパチシャッターをきってしまいます。）ベンチに座って公園で遊ぶ人、おしゃべりをしてる人をただ眺めているだけでなんだかとってもいい気分。ガウディの不思議な魅力がそこそこに漂い、あのCMをもう一度思いだしたりして。

またいつか、きっとこのバルセロナの、今よりもうすこし完成に近づいたサグラダファミリア、そしてここグウェルパークを訪れたいと思っています。



カメレオンくん！

Masumi Tange

TOWN タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 5



えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

DDXで、県外の方も安く利用できるようになりました！

かねてからTOWNの“夢”であったDDXのサポートを、今回、会員の皆様のお力添えでやっと実現することができました。

〔DDX回線番号〕

一六三〇六〇一九二七四一四六
平成元年二月一日からテスト運用開始。

高額な通信料金がネックになっている現在のワープロ/パソコン通信で、ホスト局がより安い通信回線をサポートし、利用者の負担をできるだけ軽減していくことは、ワープロ/パソコン通信の普及を促進するためにも、また活用度をさらに高めるためにも必要なことでしょう。

しかし、こうした通信環境を整備していくにはかなりの維持経費

がかかります。したがって、その有効利用について、利用者のみさんの協力がぜひとも必要になってきます。

地域づくりネットとしての一面をもつ当「TOWNタウン」としては、今後、市民の交流の場であるとともに、地域情報の発信拠点としての活用もさらに高まるものと期待しております。

たとえば、各市町村でご利用になる場合、わが町の観光案内や特産品の紹介、“ふるさと宅急便”の案内と申し込み・受付などができます。また、一方通行の情報サービスだけでなく、東京や大阪に住んでいる同出身者との日常的なコミュニケーションや、“ふるさと便り”などが、お互いに電話代を節約しながらできるでしょう。

まちづくり総合センター及びECC事務局でも、今回のDDX

の設置を機会に、つぎのような情報サービスのコーナーを新設します。

(新設予定のコーナー)

愛媛の地域情報サービス・コーナーを設けます。

〔ふるさと愛媛〕

- 県内各地の観光情報
- えひめの特産品

まちづくり総合センターのコーナーを拡充します。

〔まちづくりHOTネット〕

- まちづくりサロン
- ルポあの町この村
- まちづくり情報Q&A
- まちづくり情報・資料室

☆お問い合わせ先……

まちづくり総合センター 山本

☎ 〇八九九―二五―五五五七

***データでみる愛媛
情報化の現状(二)

愛媛の地域情報力

地域間情報流通量の算出結果から愛媛県の供給情報量のシェア分布をみると、テレビ、新聞の分野では比較的高い水準であるが、他の分野では全国の平均的水準か、あるいはそれを下回る水準となっています。

表1 愛媛県の供給情報量のシェア分布

メディア	供給情報量 (10億ワード)	シェア
電 話	12,687,768(S 57年)	全国36位
ファクシミリ	123,108(S 58年)	26位
データ通信	195,663,533(S 57年)	21位
郵便	28,981(S 58年)	22位
テレビ	170,631(S 58年)	16位
新聞	21,846(S 58年)	14位
出版物	134(S 58年)	28位

(出所：昭和62年 国土庁
「地域間情報交流に関する調査報告書」)

ミニ用語解説

☆DDXとは

パケット交換サービスというN T Tの新しいサービスで、主にコンピュータ間のデータ通信に利用されています。私達に魅力なのは、遠近格差の大きな一般の電話回線料金に比べて、割安だということです。DDXの使用料金は、距離的にはほぼ均一で、やり取りする情報の量によって加算されます。DDXの料金体系は次のとおりです。一般の電話料金と比べてみるとよくわかりますが、遠くなければなるほど割安なことがわかります。

● 毎月の料金

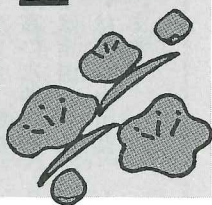
種 別	単 位	料金額	
接続通信料	符号伝送速度200b/sまたは300b/s	20円	
	符号伝送速度1,200b/sまたは2,400b/s・4,800b/s	通信時間3分までごとに30円	
通 信 料	1パケットにつき128オクテットまでごとに漢字、ひらがなの文字数にして84文字	～100km	0.4円
		～500km	0.5円
		500kmを超えるもの	0.6円

——一年を振り返って——

えひめ地域づくり研究会議の

総括と展望

えひめ地域づくり研究会議代表運営委員 岡田文淑



明けましておめでとうございます。会員の皆さんにおかれましては、「平成」元年を迎えて、心改まった新年を迎えられたことと思います。そしてマスコミを始めとして、多くのジャーナリストによる「昭和の回顧」が語られる中で、「平成の時代」へのビジョンと、二十一世紀へのそれが錯綜して

いますが、「えひめ地域づくり研究会議」もまた、本格的な愛媛の各地域における地域づくりのための、新しい運動理論と活動形態の形成を確立させていく上で、質的な元年を迎えたわけです。

昭和六十一年に久万町できっかけづくりの産声を上げて以来、二ケ年が経過しました。初期の思いと現実との間には、様々な齟齬が感じられますが、昨年一ケ年の活動実績を踏まえながら、会員の皆

さんの意気込みに馴染む在り方を模索しながら、一九八九年次の活動について考えてみたいと思います。

一、組織の存在について

えひめ地域づくり研究会議に参加している会員は、現在二百八十名を越え、数の上では県下の組織として相当の存在になっています。そしてその参加内容は、自治体の職員が圧倒的に多く、しかも市部よりも郡部に点在していることを見る限り、疲弊する自治体における地域振興への期待の高さを表すバロメーターでもあるようです。さて、会員の多くが何を拠り所として「えひめ地域づくり研究会議」に参画しておられるかと言うことについては、これまでの数回

に亘って開催してきた「課題別研究会」では、判断できかねるところです。したがって、会員の皆さんがこの組織に対して何を求め、なにをやるうとしているのか、「運営委員会」と言う名の執行部

においては、十分な把握が出来ないままに、昨年「課題別研究会」を矢つぎ早に開催しました。五十崎町における「モノ・フォーラム」に始まり、「みちⅠ・Ⅱ」を新居浜市、川之江市で、「海」をテーマに宇和島市遊子地区で開催し、締めくくりを久万町をステージにして、「木のフォーラム」まで、駆け足で一年を終えたようです。

この一年間の活動は、それぞれの開催地域の会員が、自らの地域課題に挑戦しようとする意欲に対して、「えひめ地域づくり研究会議」及び愛媛県まちづくり総合セ

ンターは、側面から支援すると言う姿勢を前提に参画しました。これらのイベントに対する会員の直接的な関心事として、どれだけの参加があったのかは分かりませんが、このイベントを通して、

「知りたい、学びたい、ネット・ワークしたい」等々の一部でも要求が満たされれば幸いなことで、開催地に何らかのインパクトを与えたことは評価できるものと思います。ただ、開催地外の会員にとつて、これらのイベントが、関心事外のテーマであったとき、何らかの不満が残されることになるでしょうが、初年次の取組としては、こうしたイベントが実施できたことを成果としたいわけです。

さらにこのようなことを次以降引き続いて開催をしていくとなると、様々な問題が浮かび上がってきます。予測される特徴的なものの一つは、地域格差の発生とでも言いましょうか、活力（エネルギー）のある地域は、次々と学習イベント等を企画し実践し、地域づくりが前進するわけですが、こうした活動のノウハウが弱い地域

では、容易に取り組めないと言う事情から、偏った「えひめ地域づくり研究会議の運動」にエスカラートすることが懸念されます。

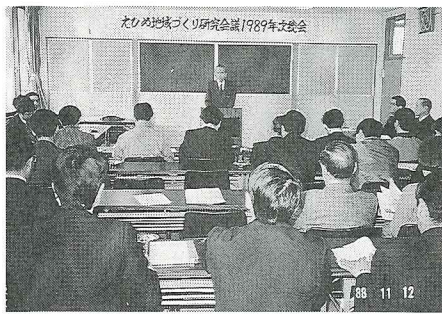
「えひめ地域づくり研究会議」の基本的な有り方は、それぞれの地域に居られる会員有志の、地域に対する自助努力に、ネット・ワークでサポートすることであろうと思います。ですから会員の皆さんと組織の関係が、「あなた仕掛ける人、私受ける人」といった上下のことではなく、それぞれの地域から課題を発信（問題提起）し受信した執行部（運営委員会）が共鳴できる会員を募り、広義のイベント化を、地域の会員と共に、地域で実践していくことであろうと思います。

二、今年次の課題

二年目を迎えたえひめ地域づくり研究会議の活動は、前年に引き続いて「地域づくり」をテーマに、さらに前進した活動を期待しているところですが、前述の課題については、積極的な対応を図りたい

と思っております。

先ず一つは、やってみたい地域課題が山積しているながら、シンポジウムやフォーラムが開催できない地域に対して、積極的に支援していくことです。ノウハウが無い、資金が無い等で悩んでおられる会員の皆さん、遠慮する事無く近くの運営委員か、愛媛県まちづくり総合センターまで相談を持ち掛けてください。



1989年次総会

二つ目には、これまでの地域活動が、ややもすると男性社会の活動であったことと思えますが、平成の時代は女性が築く地域社会かも知れません。そして全国のまち

づくり先進地の成果の影には、したたかなキャリア・ウーマンが存在することを見逃してはいけません。そこで今年次には「女性の活動」をテーマに、女性がイニシアティブを取る地域づくりを模索するイベントを計画しています。会員の中での女性の数は限られていますが、県下の意識ある多くの女性のネット・ワーキングとして、是非成功させたいと思います。地域で埋もれている「素晴らしい女性」の台頭に期待しましょう。

三つ目には、会員と執行部の緊密な関係を保つために、何らかの手立てを講じていきたいものです。昨年次の総会でも感じたことですが、総会は、基本的に会員と執行部の交流の場であるはずですから、同時開催のシンポジウム等にかまけた「パターン化した総会」にすることなく、えひめ地域づくり研究会議の有り方を論ずる場になるよう配慮していきたいと思えます。

同時に、会員と運営委員会との間でお互いの意識が交流できないことも不満の一つですから、市部や郡市の単位でも、年に一回程

度は交流が出来ないものかと思案中です。こうしたことは課題意識を越えて、人と人を結び付ける貴重なきっかけになることですし、えひめ地域づくり研究会議の大切な基本戦略でもあるわけです。ぜひ運営委員を先頭に、皆さんの知恵と行動力で、実現を図っていただき、先進地として全県下に波及できることを期待しています。

三、愛媛県まちづくり総合センターとの二人三脚で

えひめ地域づくり研究会議は、組織は大きくてもまだひよこです。この活動の影には、愛媛県まちづくり総合センターという「力強い事務局」との協働があつて、初めて機能できています。

そしてこのセンターの研究員は、その多くが県下各地から派遣されている自治体職員ですから、心易く皆さんの活動に気を配っていたできます。プライベートな気持ちで利用して頂ければ幸いです。

佐田岬からの発信



井上 善一さん

瀬戸町 井上 善一

対岸山口県の島々も展望でき日本一細長い特異な地形と風光明媚な自然を有する地域である。

半島地域は、歴史的には文化の入口、出口として海からの交流の拠点として栄えた。しかし、経済成長が効率性、画一性、機能性を求める大量生産の仕組みの中で、半島地域が残される結果となった。しかし、時代は今や多様性・個性・心・本物志向等大きく変化しつつあり、この追い風の中で、どのような佐田岬の未来を子供達に残すことができるか、我々に課せられた大きな課題と義務である。

五年間で一つの町が消えた
佐田岬地域（八幡浜市及び西宇和郡五町）の人口は、過去5年間で約四千人の人が消えた。これは瀬戸町の三千五百人を上回る数である。

佐田岬広域観光推進協議会が全国から募集したキャッチフレーズである。
昭和62年12月メロディラインが全線開通したのを機に佐田岬地域の一市五町が連合して、広域的取り組みをと推進協が設立された。
南は、太平洋に向かって日振島・戸島などの島々や遠くは豊後水道を経て九州を望み、北は、瀬戸内海に面し、リアス式海岸を形成し

日本一のミカン産地であり、又西日本一の水産基地である地域である。一次産業に特化し、これと言った産業のない地域の行く末の姿であろうか。

人が減る。しかし問題は数ではなくその中味である。真に、生まれ育ったふるさとを愛し、誇りそして一生懸命その地に生きる人間がどれだけいるか、どれだけ元気を出して頑張れるかが問題である。

西ドイツでは、農業の過疎はあっても農村の過疎はないと聞く。つまり、農業離れをしても、ふるさととは捨てないのである。

過疎地の人々は、今日まで自分達のムスコやムスメを都会へ出す事を自慢し、高い教育投資や人づくりを行って来た。

日本の高い教育水準、優秀な人材が今日の経済繁栄の大きな基礎となっていると言われる。ただし、それは中央に対するものであり今日までの中央に対する投資を地方へ還元する運動そしてその仕組みづくりが一つの地域づくり運動ではないだろうか。

日本の貧しさと

アフリカの豊かさ

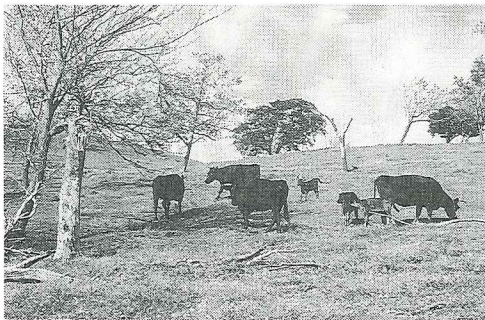
私は、青年海外協力隊員として東アフリカのタンザニアで二年間、ザイール共和国で二年余り生活した。経済成長著しい昭和43年〜48年の間であった。

アメリカ平和部隊の日本版として協力隊が発足し、日本の若者を発展途上国に派遣、相手国の国づくりに参加しながら友好親善を深めようという草の根外交の一翼を担うという事であった。

電気もなければ水道もない生活であった。一言で言えば「朝日とともに一日が始まり、夕陽とともに一日が終る」。生活である。非文明、非文化的生活を誇張するつもりはない、電気がなくても水道がなくても活き活きと素晴らしい生活ができるということである。

モノ中心に生活して来た私にとって、彼等の生活の中で、まさしく人間性の回復をみた思いであった。人間が人間らしく生きる。自然の中で自然とともに生きる素晴らしさを学んだ。

今、イナカ人間が誇るべきは、



高茂牧場（三崎牛で有名な和牛）

「ウサギ追いし彼の山、コブナ釣りし彼の川」の自然の中で、人間らしさを失わず生きる喜びではないだろうか。

ふるさと讃歌

「瀬戸の花嫁」から

瀬戸町では、観光からの活性化を模索した町制施行三十周年記念シンポをきっかけに、さまざまな試みを続けて来た。

都市との交流を通じてふるさと製品の消費拡大をと「瀬戸の花嫁便」と銘打ち、四季折々の産品を届けている。

一方「瀬戸の花嫁まつり」は、恵まれた海の幸と三崎牛で有名な和牛から「海」と「食」をテーマに掲げ、毎年八月、九軍神の碑の建つ三机須賀公園を主会場に行っている。

昭和62年7月には、全国に「瀬戸町」と名のつく自治体が二つしかないことで、お互いに友好親善を図りながら発展していこうと岡山県瀬戸町と姉妹町縁組を結び様々な交流をつづけている。

これらの事業の中心的役割は、すべて若者である。能力の有無にかかわらず地域で生きる若者の務めと私は思っている。

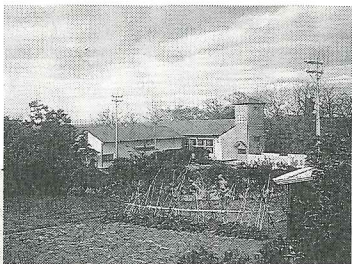
この地に生まれ、育ち、結婚しそして子供を育てて行かなければならない我々若者が町の将来を考えずして誰が考えてくれるであろうか。

未だその成果について評すべき段階ではなく、誰のために、何のために貴重な時間をかけて我々は何を為すべきかを共に考えようという問題提起しているに過ぎないかも知れない。

今は自転車操業の初期の段階であり、まだ加速がっていないので、倒れないために、ペダルを踏むのが精一杯である。

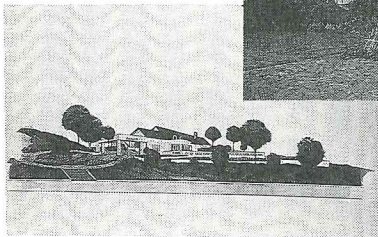
しかし、一つの実践が次の実践へのステップとなり、新しい動きが除々にではあるが生まれて来る。エンドレステープの始まりである。

① 廃校で遊休施設となっていた小学校をふるさと自然の家として改修。



▲ふるさと自然の家
「ブリーズハウス」

▼レストラン
完成予想図
(5月オープン予定)



② 国道沿線でレストランを経営する第三セクター(懶瀬戸ふる

さとセンター)を設立
従業員は、都会へ出て行っている若者のUターンで。
③ シンボルとしての目玉の風車と併せて、風力エネルギーを利用して温室栽培へのチャレンジ
④ 雇用促進事業団の野球場の誘致……等を行政も又機関車としての役割を果たさなければならぬ。

最後にトップ話を一言
お国自慢の一つに、熊本の火を吹く阿蘇の山、日本一の富士の山に対抗して、伊予のお国自慢。「天を突くような高い山が伊予にはあるが、余り高すぎて今は寝かせてある。それが佐田岬半島である」と。

戦争、敗戦、振興繁栄と激動の昭和六十余年の歴史に終りを告げ、新しい「平成」の幕明けとなった。佐田岬地域が一丸となって、寝ている山をふるい立たせなければならぬと、平成元年に記す。

木造建築の良さ見直そう

全国「木」のフォーラム開催

久万町役場 中岡 登

いま林業は、大きな危機に直面しており何とかして林業を振興させたい、停滞を打破したい、そんな願望は全国の林業生産町村の共通の命題である。木材価格および需要の低迷の原因は、外材との競合、代替材、建て方、住み方の変化、防災規制など様々である。

久万町では、木造建築の良さを再認識し、木造文化の復興をテーマに、去る八月「ミニ・木のフォーラム」を土台にし、在来軸組工法による木造建築の再建を目指し、全国の建築、林業関係同志と呼び掛け、去る十一月十二・三日、上浮穴産業文化会館で「全国木のフォーラム」を開催した。

この木のフォーラムは久万町、(財)愛媛県まちづくり総合セン



ター、(財)愛媛の森林基金、えひめ地域づくり研究会議、久万町森林組合の五団体の共催。愛媛県、愛媛県森林組合連合会等多くの後援、協賛を得て開催したもので県内外から約三百名が参加した。

— 久万町長の基調報告 —

「戦後三十年余り木造建築離れが続いたが、法の改正や補助率の見直しによって大型公共建築も可能になった。小学校・美術館など木造で建築してみたが、長い間のブランクは大きく、設計、建築技術者の不足、乾燥材の確保、加工施設など多くの問題点のあったことなどを報告した。

続いてカナダのジョン・M・パウルス氏から「カナダの木造建築の技法」と題し、スライドでカナダのツーバイフォーによる木造建築を紹介。「日本では木構造の建築は段々落ちていく。ツーバイフォー工法、在来工法何れでもよいが木構造建築を強力に推進せねばならないと思う。国産材生産地にコンクリートの建物がどんどん建っているようだ」と木造が負けてしまっているのではないかと話された。

— 木造は日本の風土にマッチ —

久万美術館の建築を指導した文化庁主任文化財調査官半澤重信先生は「私は博物館建築に携わっているが、一番気になるのは空気の

状況である。コンクリートの建物は、アルカリ分、水分、乾燥などの問題で対応に気を使っている。住宅でも同じことがいえる。コンクリートで池を作り鯉を入れるとすぐ死んでしまう。つまり、そのような性質のある家を作ることが何事かと思っている。

木がなぜ日本で使われるようになったか、それは湿度が高く、地震が多いからである。木は湿度を調整し、大きな材は火にも強い。木造は日本の風土に合っている。」と前置きされ、「日本の伝統的木造建築の技法」と題し、古来の神社仏閣建築の技法をスライドを交え講演された。

このあと、町民館に会場を移し交流会がもたれた。講師の先生方を中心に各地の情報が交換され、全国に通ずる同志の深い絆を結ぶことができた。

二日目は、

「暮らしの中から木造建築を考える」と題して、日本女子大学家政学部住居学科教授小川信子先生の基調講演が行われた。先生は、

スウェーデン人の住居管理の素晴らしさを例に引きながら、毎日生活の中で親から躰けられ伝えられてきた住居の管理や住まい方など、住居としての温もりがあったことを次のように語られた。

「それが今日では全く身につくことがなくなった。それは身の回りに木がなくなったからである。木ではないが木の様に見えるような材料が使われるようになり、生活の仕方、住み方が変わってきた。

— 本物の文化を子供達に —

現在「住教育」ということばが言われるようになった。住教育とは何か。それは人間教育である。木でないものを木であるように見せる『エセ文化』をつくってきた。子供達に本物は何なのかを伝えたい。私達の責任として『エセ文化』を住居の中で伝えないようにしたいものである。

— 木の生産者に —

木の家具や道具が現在では非常に高く、昔のように私達の手に届かなくなつた。日用品だったものが今は工芸品となっている。生産の

方法によって私達の手に戻るのではないだろうか。建築材料だけでなく、広く木質の材料が使えるよう積極的に考えてもらいたい。」

● パネルディスカッション

木造建築の再開発とその問題点
コーディネーター

愛媛大学

名誉教授 猪瀬 理 氏

パネラー

㈱日本総合建築事務所

常 務 細田 治隆 氏

熊本大学工学部

教 授 木島 安史 氏

日本女子大学家政学部

教 授 小川 信子 氏

文化庁文化財保護部

文部技官 半澤 重信 氏

猪瀬「木造資材としての林業で育てた木材がまことに冷え込んだ状況にある。活気を取り戻さないと山から里におりてしまい山の保育管理は出来なくなり荒れてしまうと思う。林野庁はじめ各関係機関においても木材需要拡大運動が推進されている。」

今日は、権威ある先生方にきていただき、久万町の生産地においてお持ちの知識のよりぬきの所をご披露いただくことに深い意義があると思います。」

— 木が好きに・木の教育を —

細田「設計者の立場から申し上げますと第一に『木は高い』第二に『木は燃える』が問題となります。適材適所の言葉は、木の使い方に對する言葉である。

土台には腐りにくい桧を、梁には粘り強い松材を、柱には柔らかい杉、桧を使います。

昔は、家具から食器にいたるまで木でした。女の子が生まれると桐を植え、桐のダンスを持たせる親の気配りが生活の中にあつた。これが日本の木の文化ではなかつたか。設計する場合、目的・環境などを考え材料を選ぶが、この際、一つの材で万能のものはない。鉄は細くても引張りに強いが火に弱い。コンクリートは火に強いが引張りに弱い。両者の欠点を補って長所を生かしているが重いのが欠点である。

木材は軽くて強く、調湿作用もある。その他、物理的に実に素晴らしい、さらに自然の材料として人をホッとさせ、感覚的にも及ばない人間的な材料である。しかし木は燃えやすい欠点をもっている。戦後都市から追放されたのもそのためである。

いま木が見直されようとしているが一次の流行に終わらせないためには、適材適所に木を使う方向で考えるべきである。燃える性能の部分は他のものでカバーする。防火施設でカバーすることが順当である。」

— 木製品は高い —

「生産地の方に要望は現地生産、現地加工システムを確立して欲しい。」

これからも木造は大規模に使われる時代ではないと思う。これは社会のニーズの問題でもある。生活の広い範囲で、住宅か



ら家具、食器に至る広い分野の需要に答えていくべきであろう。少量多品種生産が社会のニーズに合うのではないかと思う。

コストが高いことは、人の問題に帰着するのではないか。木はあるが山から出す人がいない、大工さんがいない、木造設計者がいない、若い後継者がいない。

今の都市生活者は木に接する機会が少ない、木の良さも知らない、次の世代の人に木の良さを知ってもらうことが大切である。

木が好きだったら木の仕事もするし、少しぐらい高くても木を使う、そんな人を増やすことが木の再開発にとって大事であると思う。それは木の教育である。植林現場、美しい人工林、加工体験のできる場の提供、素晴らしい木の建築、家具などの木の文化に接する場をつくり、見せ、利用させることが大切ではなからうか。」

— 含水率・強度計算は山で —

木島「在来工法は、確立された工法ではなく時代時代に変化したものである。

今は、つくり手も設計者も時代が変わっている。金物はよいとは思わないが、金物と木の組合せをやってみるべきである。

木は割れる。私は割れてもよいと思う。割れても家はもっている。割れた木の構造計算をコンピュータにさせればよい。そうしない限り木が割れることが欠点ということになる。これからの研究テーマである空海ドームの場合は集成材を使った。(瀬戸大橋88「空海ドーム」など先生の設計された建築物をスライドで紹介)

山で全部四メートルに切ってしまっている。そのため通して使いたい場合つなぐ作業をしなければならぬ。太い材は芯までの乾燥がなかなか難しい。山で葉枯らしを注文したい。

木の含水率、強度計算など山でやってくれないと鉄骨にかなわない。鉄骨ならばJIS何番といえばよい。」

半澤「人間にとって木の持つ柔らかな空間は、どこかをくすぐるのではないか。このことから、他の

材料で木に優る性能を持つ材料は残念ながらないということではないか。昨日、木は燃えないと話したが、木は燃えるのです。それが不思議なことに、小材はパッと燃えるが大材は燃えない。火は外から守る前提があります。自分の所からは火は出さない、それが大切である。」

質問「昔の学校と今の学校とは随分建て方が違っている。鉄骨を木にしたという感じである。在来工法のように単純な木造建築は考えられないか。」



木島「鉄筋で作ると簡単です。安くでき、工事も早く、設計も楽です。木造だからきれいで感激する。構造を見せて柔らかい空間の表現法にして、力学だけで決まらない現象がある。人間の動きと建築との関係を見ると鉄骨でやすく作ればよいとばかりいえない効果がある。それがいつもそうしなければならぬとは思っていない。

木は燃える、燃えないという話ですが、火災が起きたらどうするかばかりの論議がされている。私たちは火を起こさないよう注意している。それを必ず起きる前提にしている現代社会はおかしい。」

林業と地域づくりを目指し、全国に発信し問いかけた木のフォーラムであった。

これを機会に林業活性化に向けて、それぞれの地域との情報交換を期待するものであります。

皆様からの温かいご支援に對し心からお礼申し上げます。

提詩パートⅡ

君よ、何のために真実でありえるのか

樹芸の郷 久万高原塾 渡辺 浩一

君よ何のために真実でありえるのか

君よ何のために真実であるのか

君よ何のために真実たりうるのか

君よ何のために真実なのだ

君よ何の真実だ

君よ真実か

真実か

君よ



君よ何のために真実でありえるのか

語りもした 泣きもした 笑いもした

それよりも君は苦勞を数々乗りこえてきた

君の言葉は地域への愛だ

私達への素直な幸福への福音であった

されど君はなぜかく語り、かく行ない、かく

走り続けるのだ

ああ、君は何をめざそうとするのだ

君よ!!君のゴールは何なのだ

君の本質、それは我等のもの

それはちがうのか

「愛とは出向くこと」君は努めもしてきた
我等も習おう君の生きざま

しかし「あなた」なる人格は近くて遠い

私はあなたのみもとにひれ伏す使徒である

君よ、君は若い

永遠のまちづくりランナー

発せよ、我等への愚直なる進言

抱けよ愛、そして同胞の夢

なれど明かす責めを我等にあわれみ給え

君にも解らぬ人間の宇宙の神秘なれど

人は永遠の謎である

ただそこにわがろうとする人間の歩みがある

歩みがあゆみ寄り歴史を創る

君と我等も人間の歴史である

君よ何のために真実でありえるのか

まじめな私の問いである

そして愚かな私の問いである

真実こそ最も易いこと

真実こそ最も難かしいこと

美ゆえに誰もが知りながら見失ったもの

君よ何のために真実でありえるのか

友愛と自由、平等と正義、美と善政のため

人間の幸福

真理の追求

地域への愛

言葉は簡単だが全てを弁明できはしまい

ほぞをかむ想いのたけが、私の郷土の愛着空

間であり、意味空間の時間体験である

君は何のために真実でありえるのか

ムラおこしの地域づくり

あるいは自分達づくりとマチの活性化

ちがう!!

答えは「私は何のために真実たりうるか」

この自問自答のたたかひの中の自由に、君が

存することだ

愛とは愛することだ

君は内なる君の自己と、外なる君の自己の対

立の現存である

君は内なる君の世界と、外なる君の世界の対

立の総合である

そして人間の真実には利己に利他の刃が、鋭

くつきささるものである。

曰く「現象」よりも心の質を究めよ

おごそかに詩える歌にこそ本質は宿る

純なる感動のままの善行のみが

真に永遠のまちづくり運動たらんを!!

君は何のために真実でありうるのか

第2回シンポジウム「2001年心のまちづくり」

— 景観からのまちづくり —のご案内

- と き 平成元年 3月4日(土) 13時00分～17時00分
- と ころ 住友倶楽部(新居浜市王子町2番4号) ☎ 0897-37-2047
- 参加費 1,500円
- 内 容
 - 基調講演 「景観からのまちづくり」
講 師 田 端 修 氏(大阪芸術大学助教授)
 - パネルディスカッション
パネラー 田 中 滋 夫 氏(都市デザイン主宰)
長谷川 逸 子 氏(建築家)
宮 内 宏 氏(彫刻家)
コーディネーター 柏 谷 増 男 氏(愛媛大学教授)
- 主 催 (社)愛媛県建築士事務所協会
- 共 催 建築士会新居浜支部・えひめ地域づくり研究会議・
(財)愛媛県まちづくり総合センター
- 趣 旨 ここ数年来各地で、それぞれに工夫をこらした「まちづくり運動」が進められています。それは、戦後経済成長の過程で創られた、どこでも同じ様な特徴の無い、画一的な町の進行、現代の生活空間の実情に対する反省としてとらえることができます。このような画一的な環境に育った子供達にとって、我が街は「ふるさとの風景」となりうるものでしょうか。また、その子供達はどのような環境を創っていくのでしょうか。街づくりを「見える環境」=「景観」を考えることから「快適な街並みデザイン」に積極的に取り組み「文化的な街づくり」の一助とすることを目的に、今回のこのシンポジウムを企画いたしました。
- お問い合わせ先

平成元年2月20日のめ切となっておりますので参加希望の方は下記までお問い合わせ下さい。

※ なお、定員制限が200名となっておりますので、あらかじめご了承ください。

〒790 愛媛県松山市三番町6丁目5番地7

(社)愛媛県建築士事務所協会

TEL (0899) 45-5200

FAX (0899) 45-5318

まちづくり活動の情報誌として、この「舞・たうん」を隔月で発行しております。

皆様からのレター通信誌として活用できれば幸いです。

次回「舞・たうん」特集は

「くらしの風景」です。

内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にどしどしお寄せ下さい。

お待ちしております。

「舞・たうん」編集係

二人のGAL(丹下・久保田)まで。

〒七九〇 松山市道後二万一の二

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL〇八九九(二五)五五五七

FAX〇八九九(二五)六六八〇